

第5章 決勝戦にむけて

キャプテン谷口にとって最後の夏の大会、苦しみながらも勝ち進んで、とうとう学校はじまつてはじめて地区予選の決勝戦にすすむことができた。とくに準決勝は延長戦のすえ隅田中を倒しての勝利だった。

5・1 野球部の練習中

生徒A「まったく、すごい人気だな。」
生徒B「そりゃ、なんたつてうちの野球部が地区予選の決勝に進出したのははじめてだからな。」

ナインはフリーバッティングの練習をはじめた。
ファーストの加藤のところにあがったボールをピッチャーの松下、ライトの島田がとりあうようにボールに向かっていく。

加藤「オーライ！」
松下「オーライ！」
島田「オーライ！」
加藤「わっ、いてえな、このー！」
谷口「なにをやってるんだ、いまのはファーストのボールだぞ！」
生徒C「みんな、はりきっているなあ！」
生徒D「そりゃ、青葉学院と対戦するんだもん、とうぜんだよ。」
生徒C「青葉つていえば日本一も同然だからな。」
生徒D「対戦できるだけでもしあわせだよ。」

決勝で対戦する青葉学院はここ数年たてつづけて全日本大会で優勝しており、地区代表は青葉学院いがい考えられないほど強いチームであった。

加藤「ナイス、セカンド！」
校長「おおっ。」
生徒C「やるーっ。」
校長「だれかね、あのセカンドを守ってる生徒は？」
生徒C「いやだなーっ、知らないんスカ校長先生。イガラシって一年生ですよ。」
校長「ほう、一年生でレギュラーをつとめておるのかね。」
生徒C「守備も、バッティングもばつぐんですよ。なにしろ二年生の丸井がはずされたくらいですからね。」
生徒D「よせよ！」

話をしているところをイガラシがはいたためにレギュラーをはずれた丸井がうつむきながらバットをもってあるいていく。

生徒C「あ…、き、きこえちゃったかな…？」
生徒D「レギュラーをはずされてからあまり元気がないからな。」

5・2 練習後の部室で

部室の前の手洗い場ではナインが練習の汗をおとしている。

高木「いやー、きょうもきつかったなあ。」

松下「なにいつてんだこのぐらいいやなくちゃ、青葉といい試合なんかできないぞ。」

高木「わかってるよ、そりゃ負けるにしてもいい試合だけはしたいからな。」

島田「そうよ。」

部室の中では丸井が退部届けを持って、いつキャプテンにとどけようかなやんでいた。そこにナインよりもさきに谷口がはいってきた。

谷口「なんだ、丸井ここにいたのか。ちょっと相談したいことがあるんだ。」

丸井「ぼくもキャプテンに話があるんです。」

谷口「なんだ話って？」

丸井「どうぞ、キャプテンおさきに。」

谷口「じつはナインのことなんだが、どうもほんとの青葉がわかっていないようだ。このさい青葉の練習を見学させようかとおもってな。」

丸井「はあ。」

谷口「かといって青葉の練習をみて、ナインが自信をうしなってもこまるしなあ。」

丸井「そんなにすこいんですか？」

谷口「まあな……。」

丸井「だったら、みせたほうがいいんじゃないスカねえ、みんな青葉といい試合がしたいっていつてるんですから。」

谷口「うーむ。」

そこに部員が汗をながしおえて部室にはいつてきた。

松下「あれ、ふたりともまだそんなかつこうしてんですか。あいてますよ手洗い場。」

谷口「みんなちよつときいてくれ、あ、丸井、おれに話があったんじゃないのか？」

丸井「い、いえ、いいんす。」

谷口「あすは、青葉へ見学にいくぞ。」

松下「いいですね、敵情視察ですね。」

島田「おれ弁当もつていこつと。」

部室の外で丸井が退部届けをもつて考え込んでいる。

丸井「キャプテンも決勝をまえにたいへんなんだなあ、退部届けはおりをみてわたそう。」

5・3 青葉学院見学

次の日、バスにゆられて青葉学院までやってきた。バスの中で谷口はあまり部員と話をせずにつつまきかげんにすわっていた。

バスが青葉学院についた。

松下「なつかしいでしょキャプテン！二年ちかくもかよったんですから。」

谷口「まあな……。」

松下「青葉学院っておもったより小さいですね。」

谷口「ここは野球部の寮だ。」

部員「寮……？」

谷口「青葉は野球の名門だ。そのため部員は全国各地からあつまってくる。だから寮が必要なんだ。」

部員全員あぜんとしてキャプテン谷口の話をきいていた。
ナインはグラランドにはいつてまた驚いた。青葉のグラランドはまるでプロなみの設備と陣容だったからである。

谷口は昔顔なじみの吉田をみつつけて青葉の部長に見学の申し出をした。

谷口「あ、あのう墨谷二中の谷口といいますが見学させてほしいんです。」

青葉部長「スミヤ……？ たしかうちと決勝でぶつかるんじゃないかな？」

谷口「は、はいっ！」

青葉部長「そうか、みんながんばったね。まあゆっくり見学していきなさい。」

谷口「ど、どうも。」

青葉部長「吉田、ベンチに案内してやれ、あそこならゆっくり見学できる。」

青葉の部長は谷口の顔をおぼえていないようすだった。

青葉の練習はあまりにもすごかった。バッティングピッチャーの投げる球の速さもそうだがその球をバッターはかんたんに外野スタンドにまではこんでいた。そのすごさにおどろきながらも墨谷ナインは青葉の練習をみていた。

青葉部長「ようし！ 二軍の練習はそこまでだ。補欠はグラランドの整備にかかれ！」

加藤「に、二軍だって……」

部員「……」

そこに青葉のレギュラー選手がグラランドにはいつてきた。

5・4 青葉学院見学後、部室で

谷口「みんな、きょうの見学で青葉がよくわかったとおもう、それでこれからは

このスケジュールでやってほしい。」

小山「ふへっ。」

松下「朝、四時からだって……」

遠藤「しかし、ただ練習時間をながくしたってからって、そうきゅうにつまくな

るとはおもえませんか……」

高木「そうですよ！」

イガラシ「やらないよりましでしょ！」

遠藤「そ、そりやそうだけだよ。」

谷口「ただしこれからはシートノックもフリーバッティングも定位置の半分の距

離からおこなう。」

松下「は、半分だって……そんな、いくらなんでもむちゃですよ。」

谷口「まともに青葉と試合するにはこれしか方法はないとおもうんだけど。」

イガラシ「ないね、これしか。」

加藤「それもそうだな、このままじゃいい試合どころか足もとにもおよばないぜ。」

高木「うむ。」

小山「ようしみんなやろうじゃないか。」

松下「やろう、やろう！」

島田「あしたからがんばろうぜ！」

イガラシ「プッ！」

谷口「あしたからじゃない、いまからだ！」

高木「だってもうタマなんかみえませんか。」

谷口「タマがみえなくてもすぶりはできる。」

5・5 練習中

きびしい練習は雨の日もつづけられた。はじめての決勝戦進出ということでおおぜいいた見物人もあまりの練習のはげしさに、みるにたえかねだれもいなくなった。

谷口「みんな、よくやったなあ。半分の距離からなんとか捕球できるようになったじゃないか」

小山「おかげさまで。」

松下「苦しかったけど、やればなんとかできるものなんですね。」

谷口「そのとおりだ。それできょうからは三分の一の距離にちぢめる。」

部員「え……」

小山「そ、そんな。」

松下「半分でどうにかやつたっていうのに、いくらなんでもむりですよ。」

谷口「青葉のナインとはからだつきからしてちがつんだ、二倍も三倍もやらないと負けちゃうよ！」

松下「ま、負けちゃうって……、勝つつもりなんですか……？」

谷口「なんだ、おまえ負けるつもりで練習してたのか？」

松下「え……？ い、いや、そういうわけじゃ……よわったねどうにも。」

イガラシ「ああすつきりした。いい試合ができちゃ負けてもいいなんてきいちゃうと、どうにも練習に身がはいらなくて。」

部員「……」

イガラシ「さあキャプテンはよいとこはじめましょう。」

谷口「さあみんなもはやく守備につけ！」

部員「えーい、どうにでもなれ！」

5・6 練習後の部室

ナインは今日の練習でできたケガのであてをめいめいしている。

加藤「まだか、ぬれタオル。」

島田「うわっちつち！」

高木「そーつとだぞ、そーつと。」

谷口「みんなとれるまでつづけるぞ。みんなあすもはやいがおくれるな！」

そういつて谷口はナインよりもさきに帰った。

高木「ちゃつ、まったくキャプテンがうらやましいぜ……ただノックさえしていりゃあいいんだからな。」

小山「みてくれこのアザ……」

遠藤「おれなんて三本もつき指だぜ。」

島田「おれたちだって生身の人間だ、ちつとは考えてほしいよ。」

浅間「ほんとになあ……」

小山「こんなことつづけていたら、試合までにぶっこわれちまうよ。」

遠藤「まったくだ。」

松下「試合まえにこわれちまったらもともこないぜ。みんなキャプテンに抗議しようぜ！」

加藤「そつだ、そつだ。」

イガラシ「すぎだね、抗議が……」

小山「松下よせよ、こんなバカあいてにするの、それよりはやくいこうぜ。」

あやつく松下とイガラシがケンカしそうになったが、小山が中に入りこたきをえた。ナインはきがえをすませて谷口の家までむかった。もちろん猛練習の抗議をするためである。部室にはイガラシ一人だけぼつんとりのこされたかつこうになった。

イガラシ「まったくどうやってあんな連中をキャプテンはここまでひっぱってきたんだろつ。」

5・7 谷口の家

イガラシをのぞくナインが谷口の家に来た。丸井も特訓には参加してなかったが、きのうわたしそこねた退部届けをもってみんなといっしょについてきた。

部員「こんばんはーっ。こんばんはーっ。」

母「おや…タカオの友だちかい？」

松下「あのう、野球部のもですがキャプテンいますか。」

母「タカオなら御岳神社にいつているよ。」

松下「御岳神社…？」

母「ここをまっすぐいったつきあたりだよ。」

部員は谷口の母親からつけられた道を歩きはじめた。

加藤「神社なんかになににいったのだろう？」

松下「青葉に勝ちますようになんて願をかけにいったんじゃないか。」

神社にちかづくとなにやら音がきこえてくる。

「ズン！」「バキ！」

父「ほら、しっかりしろっ。」

谷口「うーっ。」

そこでは谷口と父親が練習をしていた、父親の手づくりマシンからくりだすタマを谷口がとろうとしていた。

加藤「キャプテンじゃ…」

松下「しっ。」

加藤が谷口に声をかけようとするが、松下にとめられる。ナインは谷口と父親の学校以上のきびしい練習にあつとつされる。

父「いくぞっ。」

谷口「くくそっ。」

父「だいじょうぶかタカ！　いくらなんだってちよつとむちゃしすぎじゃねえか。」

谷口「お、おれみたいに素質も才能もないものはこうやるしか方法はないんだ。」

父「しかしなあ…」

谷口「さあつけてよとうちゃん。」

けつきよくナインは谷口に声をかけずにきた道をひきかえしはじめた。

松下「お、おれたちのコーチにおわれてこんなところで練習してたんだ…」

部員「……」

加藤「おれ家までランニングしようっ。」

松下「お、おれも！」

小山「おれも！」

島田「おれも！」

丸井「……」

丸井は一人神社のまえにとりのこされてしまった。ポケットにいれてあつた退部届けをだしてじつとみつめている。

丸井「くくそっ。」

退部届けをビリビリにひきさき、地面にたたきつけた。そしてナインの後をおうように走りだした……。

このようすをとおくからみている一人のすがたがあつた。

イガラシ「これなんだなあ…、キャプテンがみんなをひっぱる力は…。」

イガラシはナインに気づかれることなくそつと
あとをつけてきたのだった。

